

## LAMPIRAN.

### CERPEN マーガレットは植える (Margaretto wa Ueru)

Karya AOKO MATSUDA.

マーガレットは植えた。バラの花を植えた。スミレの花を植えた。スズランの花を植えた。シロツメクサの花を植えた。もちろんマーガレットの花も植えた。箱からマーガレットの花が出てきた時、マーガレットは「また会ったわねー」と小さな声でつぶやくと微笑んだ。年月がフェザータッチで描いたなだらかな曲線がマーガレットの目元口元で躍った。マーガレットは植えた。きれいな色の風船を植えた。鼻にこそばゆいようなすつとする香りのリップクリームを植えた。厚みのあるマグカップを植えた。カシミアの靴下を植えた。植えることがマーガレットの仕事だった。だからマーガレットは植えた。派手ではないが、素敵なものを植えた。飽きがこないのを植えた。袖を通したら一日いい気持ちで過ごせそうなものを植えた。やさしい感じの、やわらかい感じの色を植えた。やさしい感じの、やわらかい感じの手触りを植えた。マーガレットは毎日植えた。日々を愛おしむ心を植えた。気に入ったものを長く使う心を植えた。丁寧に扱う心を植えた。マーガレットは急がなかった。マーガレットはゆっくり植えた。ここはゆっくり植えてもいい場所だった。ゆっくり植えてどれだけの時が経ただろう。無造作に毛先がはねているところどころ白いものがまじった薄茶色の髪に、コットン〇〇%のカットソーとズボン、無骨でありながら繊細でもあるフレームの眼鏡をかけたマーガレットとマーガレットの庭を夕暮れの光が淡く包み込んだ。その光景を通りすがりの人が見たら、まるで天国のようだったかもしれない。

マーガレットは疲れた顔でタウンワークをめぐっていた。化繊だということを本人も気付いていないまま無頓着に着ている服がちくちくした。ドトールの二

階、トイレに一番近い席だった。アイスコーヒーの氷が溶け、グラスがびしょびしょになり、ついでに下に敷かれた紙ナプキンを貫通した水滴でテーブルもびしょびしょになる現象をマーガレットは心底にくんでいたので、いつもは清々しくすぐに飲み干すように心がけていたのだが、毎週月曜日だけはだらしなく水が感らんでいくのに任せていた。どれだけこんな不毛な日々を過ごしているのだろう。タウンワークの発行日を心待ちに一週間を送る日々だ。毎週月曜日にはファミリーマートでタウンワークをもらい、そのまま通りの向かいにあるドトールでページを開いた。今週こそは自分にぴったりの仕事が見つかるかもしれない。ページを開く前どうしたって一瞬期待してしまう。その希望は薄い冊子を閉じる頃には諦念の混じった絶望に変わる。毎度のことだった。マーガレットはいいかげん気が遠くなりそうだった。求人は毎週ちゃんと重新されていた。新たな求人が生まれていた。不思議なのは歯科医院の助手の募集だった。この世にそんなにたくさんの歯科医院があるのだろうかと思ふほど、毎週湯水のように歯科医院の助手の募集が湧いていた。求人募集を見るのは面白かった。けれど実際問題、マーガレットはどの仕事にもどうしても応募する気になれなかった。「フレンドリーな職場です」と書いてあると駄目だった。フレンドリーな人たちと一緒に働ける気がしなかった。「あなたの夢を応援します」という店長からのエールの横に、頭にパンダナや手ぬぐいを巻き、楽しそうに笑っているバイト仲間たちの写真が添えられていると駄目だった。夢がある人たちと一緒に働ける気がしなかった。客の誕生日が判明した時に、手拍子しながらハッピーバースデーを歌わせられそうな店は駄目だった。作務衣みたいな制服がある店は駄目だった。「頼りになる先輩がしっかりサポート」も駄目だった。今までマーガレットは頼りになる先輩に出会ったことなどなかったからだ。つまりマーガレットは疲れていた。人と関わることに、人と働くことに疲れていた。働くことにはまだ疲れていない気がした。たった一人で誰ともしゃべらなくていい仕事がしたかった。そんな仕事はなかった。けれどマー

ガレットはある 週、べらべらしたページの小さな四角い枠の中にそんな仕事を見つけた。

最初に箱から出てきたのは真っ白いシャツだった。マーガレットはおそろおそろ、でもマニアル通りにシャツを植えた。シャツをちゃんと植えることができ、マーガレットはほっとした。それから箱から出てくるものを一つ一つ丁寧に植えていった。箱は毎日届いた。クロネコで届く日もあれば、佐川で届く日もあった。九時から一八時まで、実働八時間で時給は九〇〇円。土日は休みだった。マーガレットは少し時給が安いなと思ったが、すぐに仕方ないと思い直した。何しろ植えるだけの仕事なのだ。それに配達員から箱を受け取るとき以外は、誰とも会わなくていいし話さなくていい。ノルマはなかった。箱の中身をすべて植えきることができなくても、次の日に植えればよかった。だからマーガレットはゆっくり植えた。きれいな音のする陶器の風鈴。色とりどりのマカロン。戦闘美少女のフィギュア。バンドTシャツ。箱からは次々と出てきた。マーガレットは自分の手元にやってきたうつくしいもの、素敵なものを一つ一つ忘れてしまわないようにゆっくり植えた。マーガレットは箱から出てくるものを全部愛おしいと思った。それが何より一番うれしいことだった。

箱から出てきた死んだネズミを見てマーガレットはびっくりした。マーガレットはほとんどつ

まむようにしながら死んだネズミを植えた。箱からくしゃくしゃになったハンカチが出てきた。マーガレットはくしゃくしゃになったハンカチを植えた。泥水が出てきた。マーガレットは泥水を植えた。休憩時間にマーガレットは近くのスーパーでゴム手袋を買った。ゴム手袋をはめたマーガレットは植えた。ぐっしょりと濡れたぬいぐるみを植えた。しなびた野菜を植えた。羽をもがれた鳥を植えた。赤黒い血が染み付いた絨毯を植えた。マーガレットは箱から出てくるものをまっすぐ見つめることができなかった。何が起こったのかわからな

かった。一つの考えが箱から出てくると、それからすぐ後にそれとは正反対の考えが同じ箱から出てきた。一つの思いが出てきた後には、また正反対の思いが出てきた。マーガレットは混乱した。混乱したままマーガレットは植えた。割れたカップを植えた。切り取られた舌を植えた。誰も愛することができない心を植えた。にくしみを植えた。怒りを植えた。埋めたいと思いながら植えた。マーガレットは箱か

ら出てくるものをすべて埋めてしまいたかった。どれだけ芽を伸ばしても地上に到達できないくらい地中深くに埋めてしまいたかった。それができるのはここにいるマーガレットだけなのにマーガレットは植えなければならなかった。だからマーガレットは植えた。はやく枯れろと願いながら植えた。枯れろ枯れろ枯れろ。マーガレットは小さな声でつぶやいた。マーガレットの仕事はそういう仕事になってしまった。マーガレットはゆっくり植えることを忘れた。新しい箱が届くと気分が沈んだ。少しでもはやく箱をさばこうとした。でもどれだけ箱をさばいても、以前のようにマーガレットの心が温かくなるような素敵なものは出てこなかった。マーガレットは悲しみを植えた。マーガレットは不安を植えた。マーガレットは後悔を植えた。マーガレットは恐怖を植えた。マーガレットは恐怖を植えた。マーガレットは恐怖を植えた。マーガレットは恐怖を植えた。マーガレットは恐怖を植えた。くる日もくる日もマーガレットは罰ゲームのように恐怖を植えた。今までのように手製の弁当でゆっくり休むこともなく、コンビニのおにぎりを作業の傍らもそもそかじった。マーガレットは深く呼吸することを忘れた。視界が狭くなった。マーガレットは恐怖を取り落とした。あと思ったマーガレットは我に返った。マーガレットは落とした恐怖を拾うと急いで植えた。気が付くとマーガレットの身体は汗でべたべただった。不快だった。気持ちが悪かった。マーガレットはかつらをとった。こもった熱とともに硬い黒髪が解放された。度数のついていない眼鏡をとると、顔をこすった。眉墨で書いた骸が斜めによれて消えた。何がマーガレットだ。まだ三〇

年も生きていないくせに、一丁前に疲れたふりの馬鹿な女じゃないか。埋めたいものも植えるしかない女じゃないか。臆病で何もできない女じゃないか。真希子は泣いた。真希子は庭の真ん中に突っ立って泣いた。

(少しだけ昔に森茉莉という作家がいて、彼女は自分のことをマリアと呼んだ。真希子は森茉莉 が大好きだった。茉莉さんがマリアなら、自分がマーガレットでもいいじゃないか、誰に迷惑を かけるわけじゃなし。真希子は思った。箱の配達員たちが不可思議な顔と気持ちで真希子のこと を見ているのは知っていたが、この職場にいる間、私はマーガレットだ。はじめてシャツを植えたあの日、真希子はそう決めた。)

真希子は泣きながら庭を見渡した。恐怖が霧のように低く充満した真っ黒な庭は真希子をずぶ ずぶ呑み込む沼のようだった。ブラックホールのようだった。真希子はどこでもない場所に立っ ていた。ここはどこだろうと真希子は思った。真希子は気が付いた。最初から選ぶ権利など真希 子にはなかったのだ。選べるわけなんてなかったのだ。そりゃそうだ。真希子は小さく笑った。

涙はもう出なかった。真希子はかつらをかぶり直した。タオルハンカチで顔をふくと、かばんの

中から化粧ポーチを出した。手鏡を見ながら皺を書き直した。眼鏡をかけた。植えてやる。植えてやるとマーガレットは思った。マーガレットは箱に手を差し入れた。恐怖が箱から顔を出した。 マーガレットは目をそらさなかった。まっすぐ恐怖を見つめた。そしてゆっくりと恐怖を植えた。 きれいに植えた。マーガレットは決めた。私には選ぶ権利がない。でも待つことはできる。こ こでこうして植え続けたら、いつかまた素敵なものが、見ているだけで心が温くなるものたちが、 箱から出てくる日が来るかもしれない。ならば私はここで待つ。植えながら待つ。マーガレット は恐怖を植えた。マーガレットは恐怖を植えた。

マーガレットは深呼吸した。マーガレットは恐怖を植えた。軽くストレッチして身体をほぐした。水筒に入っているいい香りのハーブティーで一休みした。マーガレットは恐怖を植えた。マーガレットは恐怖を植えた。クロネコの配達員が次の箱を届けに来た。マーガレットは笑顔で箱を受け取った。クロネコの配達員はマーガレット

の笑顔をはじめて見たと思った。箱の中身はまだわからない。メンズライクなデザインでちょっとやさそとでは飽きがこない腕時計が終業時間をマーガレットに告げた。マーガレットは明日の箱を明日開けることにした。マーガレットは明日も植える。

